ミナトブンカサイ ～開港120周年に、ちょっと先の未来を創造する。～ 完了報告書

概要

ミナトブンカサイ実行委員会は、2019年度における事業で、下記3点を目標として活動した。

1. 清水港日の出地区でイベントをしかけ、空間の利用イメージを高めたり、提案を発表する。
2. エリアブランディングのデザインを提案・発信する、
3. 将来的に開発を進めるための「関係者プラットフォーム」のきっかけをつくる。

「1」については清水港開港120周年の関連事業として10月にミナトブンカサイを開催し、日の出地区の倉庫街の路上および倉庫の一部活用をシミュレーションするイベントを開催した。マルシェの出店や音楽・パフォーマンスをはじめ、トークセションでは当エリアの空間の利用を高めるためのトークショーや市民のみなさんからのアイデア出しも行った。また、次世代モビリティの社会実験も行い、港エリアの風景や風をスローモビリティで堪能してもらい、アンケートへ協力の協力を踏まえてニーズや改善点などを捉えることができた。

「2」については、かつてお茶の輸出量が日本一だった清水港の特徴をブランディングするために「Shizuoka Teaism」をコンセプトに、清水で有機栽培された茶葉をブランディング商品にし、茶葉の販売や開港120周年事業と併せて日の出地区の路上等にカフェを出店することで、お茶による空間利用のイメージを与えた。また、次郎長エリアの空間的資源や、日本らしいセーボリー&スウィーツに着目した各商店の商品を取り上げたマップを作成し、街歩きツアーを実施することで、慣れ親しんだエリアの魅力を改めて評価するきっかけを作った。

「3」としては、上記の事業を、常葉大学、横浜国立大学、東京大学、九州大学、茨城大学、静岡理工科大学をはじめ、静岡市経済局海洋文化都市推進本部、静岡県清水港管理局、次郎長通り商店街、株式会社鈴与、株式会社ボクラノマチ、ヤマハ発動機株式会社、静岡県立大学、株式会社Otonoと連携して実施した。非常に多くの団体と連携して実施できたことが最大の成果であり、今後の「関係者プラットフォーム」づくりのきっかけができた。

ミナトブンカサイは2019年10月13日（日）、14日（月祝）に実施した。両日とも清水港日の出埠頭の屋外特設会場で実施の予定であったが、直前に台風19号が襲来し、13日（日）は会場の準備ができないこと、交通機関が大幅に乱れたこと等から、清水マリンビル別館浪漫館で、午後から公開講座のみを実施した。14日（月祝）は日の出埠頭の屋外特設会場で実施したが、この日も午前中から降り出した雨が午後には本降りとなり、夕方前に屋外は撤収し、再び浪漫館でトークセッションの第二部を実施した。

なお、これに先立ち、7月13（土）、14（日）に行われた開港120周年記念事業イベントにおいてShizuoka Teaism caféを出店し、広報を行った。また、2020年2月16日（日）には、鈴与株式会社興津研修センターにて活動報告会、意見交換会を関連事業者、行政関係者を交えて実施した。

以下、10月14日（月祝）に実施した上記「1」「2」の内容および成果について報告する。

ミナトブンカサイ　**2019** 年 **10** 月 **14** 日（月祝）

ポスター　**A2** サイズ

トークセッション　～清水のちょっと先の未来を考える～

ミナトブンカサイ 2019 のメインとなるイベントとしてトークセッションを企画・実施した。本企画では、ミナトブンカサイのスローガンとなっている「清水のちょっと先の未来を考える」ために、来場者と企画者、また登壇者を招いて日の出埠頭の今後について議論する場を設けることを目標とした。登壇者は静岡市や静岡県の職員の方や、地元で観光業を営んでいる方、大学生、学生団体のリーダー等多様な方面に声をかけ、経験談や活動紹介、清水をよくするアイディアを発表頂いた。これは、来場した市民に、まちづくりやイベントの企画を、より身近に感じてもらい参加を後押しすることに繋がったと思う。実際にトークセッション時の意見として、今後日の出埠頭でのイベントに参加してみたいという声もあった。また、トークセッションに市民が気軽に参加できるように、ホワイトボードと紙を利用して各々の意見を発表できる場を設けた。20 通以上の意見が寄せられ、これらは今後のプロジェクトへのヒント、良いアイディアとして活かすことができると考える。

トークセッションは時間帯の異なる二部に分けて実施した。第一部では、ミナトブンカサイの運営を担当する学生、日本茶の販売を行うプロジェクトのメンバー、清水の地域活性化プロジェクト「ＬＯＬ」の代表小倉さん、また「日本平夜市」の運営メンバーの方々が登壇した。その後、登壇者の発表を聞いた市民に紙を配り、「日の出埠頭でやって欲しい・やってみたいこと」を書いてホワイトボードに貼ってもらった。ホワイトボードはトークセッション後も会場内に残し、来場者に思いついたアイディアを自由に書くことのできる場とした。第二部では、静岡県と静岡市の職員の方、日の出倉庫の建築材料にも使われている伊豆石の保存会の方、清水で観光ガイドを制作する株式会社 Otono の代表、また次郎長商店街でガイドマップを制作したプロジェクトの学生メンバーが登壇した。その後は、来場者を４つのグループに分けて、一部、二部の発表や集めた市民からの声を踏まえ、日の出埠頭でできること、アイディアをディスカッションする機会を設けた。会場には学生や企業の経営者、また年齢、性別、国籍の異なる様々なメンバーが集まったため、多様な意見を交換する場になったと思う。

まちづくりは本来、街に住む市民が主体となって自らの街を良くしていくために行われるものであり、その一つとして今回のミナトブンカサイも位置付けられる。まちづくりへの市民の関心はもっと高める余地があり、市民の積極参加によって地域活性化をより展開させていくことができると思う。今回のトークセッションは市民の関心を「まちづくり」に向け、自発的な地域の活性化を促進することを目的としている。今後も市民に開かれたイベント、ミーティングまたトークセッションの場を設け、清水の「まちづくり」を共に考え、行っていく仲間を増やす取り組みをしていきたいと考える。

屋外での第一部

浪漫館での第二部

Shizuoka Teaism　～海を守るお茶・Shizuoka Teaism カフェの創出～

Shizuoka Teaism では、「人のつながりをつくる」ことを実践するために、Shizuoka Teaism café の企画運営を行った。カフェでは、ぬくもり園で有機栽培され、学生たちが手摘み、手揉み茶を行った茶葉を、急須でいれ、お菓子と共に提供した。手揉みの特徴である「お湯に浸すと茶葉が綺麗にひらく」ことと、有機栽培の利点である「茶葉を安心して食べられる」ことを伝えるために、出がらしの茶葉に味噌を付けて食べてもらう工夫をした。また、ぬくもり園の協力のもと、プロジェクトのメンバーでパッケージデザインをした商品「海を守るお茶」を販売した。

出がらしの茶葉に味噌を付けて食べるアイデアは、お茶どころ静岡で暮らす人にとっても新鮮だったようで好評だった。その上で「手もみ茶だからこその開き方」であり、「有機栽培だから安心して食べられる」ことを伝えられたのは、とても効果的であったと思う。その説明を通じてお客さまと私たちのつながりが生まれた。人工芝とパレットでつくった椅子に座り、そこでお茶とお菓子を味わいながら楽しんでいる様子も見受けられ、嬉しく思った。

私たちは、伝えたいことをメッセージカードに書き商品と共に渡す方法をとった。そして、トークセッションで活動内容やお茶の魅力を発表し、次郎長班のガイドとも連携したことで、私たちが販売する商品を購入していない方や、お茶に興味を持っていない方にも知っていただけたと思う。

音楽　～音楽を通してミナトを感じる～

音楽は 67 番倉庫でのメインステージの運営を担当した。準備段階では、タイムスケージュールの決定、出演団体への交渉、当日のステージ設営や PA 作業を行った。また三角広場では、出演者の友人有志による時間設定のない音楽演奏も実施した。

株式会社ボクラノマチの協力を得て、「日本平夜市」で音楽演奏やダンス披露をされている団体に募集をかけ、当日は 5 団体による音楽演奏・ダンス披露が行われた。「音楽を通して来ていただいた方々にミナトを感じてもらう」ということをテーマに、例えば、「舞姫っコ」には港かっぽれを披露していただくなど、来場者に清水の港を感じていただけたと思う。

ミナトブンカサイを終え、持続性が課題である。音楽演奏やダンス披露の場合、一度のイベント内で収束してしまい、今後どう繋げていくのかは様々な策を考えなければならない。地域活性化という視点で捉えたとき、来場者から観覧料を徴収し、次の事業の資金に回すという発展の可能性も検討す

る余地がある。

「舞姫っコ」による港かっぽれ

津軽三味線の演奏

次世代モビリティ　～スローモビリティの社会実験～

1.　実施内容（計画）

(ア)日時

2019 年 10 月 13 日（日）、14 日（月・祝）10:00～16:00

※13 日（日）は台風のため取りやめ

(イ)目的

・臨港地区内にあるドリームプラザ、埠頭、倉庫街の各所を、電動カート（ナンバープレート付き）を走行させることで、直径 1km 圏内の補助交通として来訪者に体験乗車してもらう。

・公道および自歩道を対象としたルートにて、厳重な警備・設営が必要のない日常的な条件で、補助交通が走行できるよう、社会実験を通じて走行上の留意点や課題点を把握する。

(ウ)カート運行区間

・ドリプラライン（ドリームプラザ～マリンパーク～倉庫街）

・埠頭ライン（日の出埠頭～倉庫街）※当日は客船抜港のため、運行取りやめ

図 1　カートの運行経路

(エ)カート運行方法

ヤマハ発動機の 7 人乗りの電動カートを使用した。13 日は運行中止、14 日は台風の影響により客船の寄港は取りやめとなったため、ドリプララインを単純往復させる形となった。運転は研修を行ったうえで関係者により行った。また、安全面を考慮し、カート乗り場と道路横断箇所に交通整理員を配置した。

2.　結果

社会実験である本事業では、運行日当日の利用者数のカウントと、利用者・関係者向けのアンケート調査を実施した。以下に一部抜粋した結果を記す。

(ア)利用者数

表 1　10/14(月祝)の利用者数

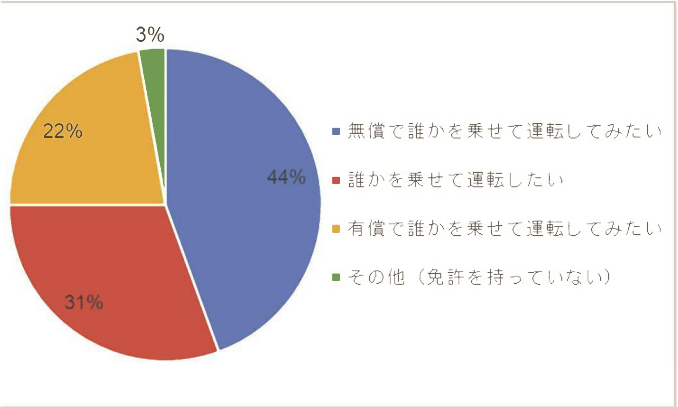
時刻	10 時代	11 時代	12 時代	13 時代	14 時代	15 時代	合計
利用者数	17	34	28	26	24	25	154

(イ)利用者向けアンケート

①アンケート項目

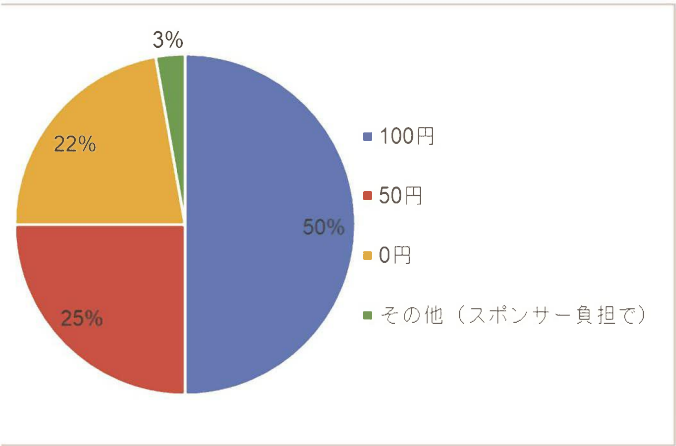
性別、年齢、居住地域、将来的にカートが走行してほしい場所（自由記述）、カートを運転することへの興味、有償化の場合の乗車金額、乗車理由、快適性、安全性、利便性、その他（自由記述）

②本格的な運行を行う場合、運転することに興味はありますか？



カートを運転することへの興味

③今回と同じ条件なら、何円だったら乗りますか？



有償化の場合の乗車金額

(ウ)関係者向けアンケート

④アンケート項目

回答者の所属、関わった日、関わった内容、安全性（自由記述）、乗客の様子（自由記述）、外国人対応（自由記述）、今後のサービス（自由記述）、その他（自由記述）

⑤安全性について

U ターンするには道路幅が 10m 以上必要である、歩行者が多いところの U ターンにおいては外で安全を管理する人がいた方が良い、走行音が小さくカートの存在に気づかれにくいが音によって接近を認知させることが可能である、わずかな段差でも衝撃が大きい、歩行者が多い場合の歩車共存への不安、交差点進入時に他の車両がスピードを上げている、などの意見が出た。

⑥乗客の様子について

おおむね楽しんでもらえた、特に子供は乗りたがっていた、マリンパークでは回り道ルートであるが会話したり案内したりしながらでは長く感じなかった、などの意見が出た。

⑦今後のサービスについて

運行本数の増便や待つためのベンチの設置、カートについての説明ボードの設置、カートがいない時でも通り道であることが分かるようにする施策、大きな交差点への変則的な進入や縁石の段差の回避、などの意見が出た。

⑧その他

今後は交通整理員がいなくても運用可能にする必要がある、簡易的な車両位置情報の把握と乗客への情報提供、自動運転だと本当に面白く魅力的である、持続可能性の観点では輸送人数に対する運転手の人件費が課題、などの意見が出た。

次郎長　～次郎長商店街通りのマップ制作・街歩きガイドツアーの実施～

このプロジェクトは清水の地域資源のブランディングを通して地域の活性化に貢献することを目的とした取り組みである。魅力ある地域資源の一つとして「清水次郎長」を取り上げた。次郎長の歴史を継承し、次郎長通り商店街ににぎわいを創出する手段として、マップを制作・配布した現在、清水の市街地を訪れる観光客はエスパルスドリームプラザを中心とする臨海地域に集中している。また、クルーズ船に乗ってやってくる外国人観光客の多くは、下船後、大半が県内の他地域にバスで移動してしまう。一方、臨海地域から徒歩圏内にある次郎長通り商店街にはあまり観光客が見られない。臨海エリアと商店街をつなぐ導線を生み出し、地域経済を活性化すべく、次郎長通り商店街周辺に特化したマップを制作した。

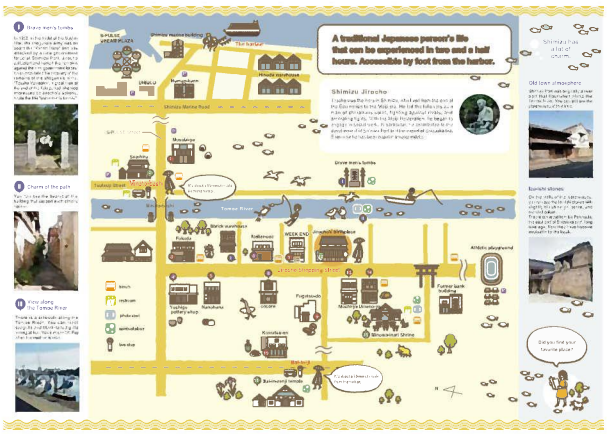
次郎長通り商店街の飲食店や雑貨屋などの店舗の中から、観光資源となりうる店舗を選出し、個々にインタビューを行い、営業情報を収集した。また、得られた情報をもとに店舗の特徴・魅力を伝える文章を制作した。店舗情報の他に、地域の中にある歴史的建造物や次郎長の歴史に関する紹介文を加え、マップ上に記載した。また、マップのデザインも全くオリジナルに行った。

制作したマップはミナトブンカサイにおいて来場者に配布した。また、日の出倉庫街エリア・次郎長通り商店街を巡るガイドツアーを実施した（当日は外国人向けの英語によるガイドも企画していたが、客船寄港が中止となり日本語ツアーのみとなった）。

その後、使いやすさ、見やすさ等の改善を行い、改訂版を制作するとともに、英語版を制作した。英語版は、単に日本語を訳しただけでなく、日本の一般的な市民生活を気軽に見られるという観点に気をつけた。また、株式会社 Otono、常葉大学と連携し、音声ガイドの QR コードをマップに添付し、観光客が人のガイドに頼らずに自由に観光することができるような仕組みを整えた。なお、マップの製作費については常葉大学の助成金を使用した。

マップは日常利用を目的としたものであり、普及の程度・利用状況に関しては今後長期的に検証していく必要がある。ただ、現在清水の観光案内所や商業施設で配布されている観光マップにおいて、次郎長通り商店街周辺に重きを置いたものは他に存在しないため、商店街の情報を集約することができたという点のみに着目しても、有意義な活動であったと言えるであろう。また、ミナトブンカサイでは多くの来場者にマップを配布することができた。ガイドツアーにおいては 15 人の参加者を募ることができた。次郎長通り商店街の知名度を向上させ、日の出倉庫街や次郎長通り商店街の地域資源が持つ魅力についても発信することができたと考えられる。また、ガイドツアー終了後、参加者のうちの半数ほどが商店街の店舗において食事・買い物をする様子を確認することができた。僅かではあるが、地域経済の活性化にも貢献することができたと考える。

今回の取り組みは、次郎長通り商店街周辺の地域資源や店舗の魅力を観光客に対して発信することを目的としたものであった。しかし、次郎長通り商店街マップは地域住民にも影響を及ぼすのではないかと考える。マップを手にして商店街を訪れる観光客が増加すると、地域の中ににぎわいが生まれ、その様子を見た地域住民の中から、商店街において新たな取り組みに挑戦しようとする人が現れるのではないだろうか。観光客の視点から地域を見つめなおし、魅力を再発見する機会を住民に提供することができるのではないかと考える。



フォトジェニックコンテスト　～みんなに伝えたい清水の魅力～

この企画の目的は「清水の隠れた魅力を写真にとって住民の方に気づいてもらう」ことである。写真として残すことで記憶に残る風景が保存され、次に使えるようになることを意図した。コンテストの方式は、参加者に清水の街を写真で撮ってもらい、インスタグラム・メールで撮った場所を記入の上、応募してもらった。応募総数は44件。下の写真が受賞作品である。

海洋文化賞

日の出倉庫街賞

このコンテストでは静岡市海洋文化都市推進本部とエスパルスドリームプラザと連携し、賞の選定にあたった。街づくりに直接関わっている当事者と住民の皆さんがどんな場所を良い空間と感じているかを一緒に考える場となった。

会場デザイン　～倉庫街の空間活用のイメージを創出する～

会場デザインは、鈴与株式会社、鈴与株式会社、株式会社ボクラノマチ、チームガーランド等と連携、協力して行った。ミナトブンカサイのテーマである「清水のちょっと先の未来を考える」を会場としてどう表していくか、今後も日の出埠頭を人々が集まる空間にしていくにはどうすればよいか、を念頭に置きつつ、会場のレイアウトを考えた。

具体的には、倉庫群を歩きながらマルシェやイベントを楽しめるよう、マルシェを種類ごとに分散させて配置し、ステージをメインストリートの中央に置くことで倉庫群の解放感と音楽の融合を楽しんでもらえるように計画した。実際には、当日の天候の関係で、音楽ステージも倉庫内に設置することになったが、倉庫内で奏でられることで、音の独特の響きを感じられる音楽ステージができた。トークセッションのアンケートの「今後、日の出埠頭でやってほしいイベント」項目の中でも、音楽イベントが多数意見として寄せられていたので、今回は新たな倉庫の活用法、可能性を提示できたと思う。

パレットを使ったストリートファニチャーの設置も行い、来場者の休憩・飲食ポイントを確保するとともに、パレットの新たな活用法を使って感じてもらった。円形のスタイロフォームを座布団代わり（シーザブ）に用いて客席を作るなど、ミナトらしい装飾、工夫もできた。

駅やドリームプラザから会場までには距離があり、その動線をどう工夫するかという課題も音楽班やモビリティ班と協力しながら検討した。会場の入口である三角広場に音楽ステージを設置することで、来場者を歓迎するとともに、イベントの宣伝効果も狙った。また、ドリームプラザから、会場入口へモビリティを運行し、次世代モビリティの乗り心地を体験してもらった。台風の影響や、当日の天候の関係で、一部予定を変更したが、事故なく無事に開催できた。倉庫利用の価値や、伊豆石の魅力などを各大学が連携することで見出し、来場者や市民に伝えることができた。

今後の課題として、広報活動や集客の難しさが挙げられる。今回の来場者の多くは、関係者及びその知り合い、また近所に住む方であり、たまたま訪問したお客さんからも「事前に知っていればもっとゆっくりいられたのに」「友達も連れてきたかった」などの声を頂いた。プロジェクトページを充実させたり SNS を活用したりするなどより媒体を広げる必要がある。